

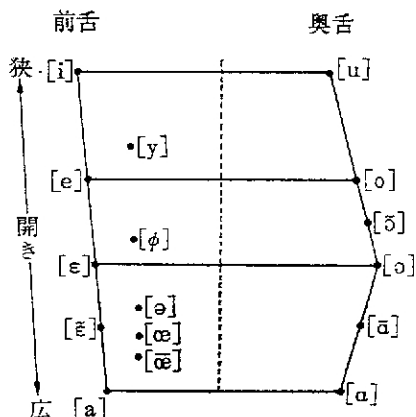
## フランス語の日本語への干渉

—音声の面において—

会 津 洋

1-0-0 まえおき：日本人がフランス語を学ぶときまずぶつかるのが発音の難関である。とすればフランス人が日本語を学ぶときも発音は障害ではないのか。答えは意外にもノーであった。少なくともこれを書くために面接をもとめた日本在住もかなり長く日本語も大分たっしやなフランス語系人5名の返事はノーであった。ただそのうち2名は始めはやさしい、つまりすぐ発音で日本人に通ずると思っていたけれどかなり学習が進むとやはりいくつかの難しい発音がある、また特にイントネーション、アクセントがどうも日本人と違ってしまふ、やはり最初より正しい発音、イントネーション、アクセントの訓練が必要だ、と認めていた。

ここでは両国語の音、リズム、イントネーションなどを全面的に対照させるのでなく、フランス語系の人が、母国語が干渉するので日本語学習が



困難になる点を整理したに過ぎない。なにか日本語授業の実際面において役立つ点があればしあわせである。

**2-0-0 フランス語音の特性：** 比較の前にフランス語の母音・子音の特性を概観したいと思う。

### 2-1-0 母音

**2-1-1 調音点が前より：** 前頁の図で示されている通りフランス語では母音 16 のうち 10 が口腔の前部を使って調音される。英語のばあいには 10 のうち 4 であることと比較すると「前より」はひとつの特性であろう。(ちなみに日本語は 5 のうち 3 である。)

**2-1-2 円唇母音が多い：** 平唇は [a, ε, e, i] の 4 つしかなく 16 のうち 12 は唇をまるめると同時に唇を突出させて発音される。

**2-1-3 音が純粹なこと：** やや抽象的だが、つまり現代フランス語では二重・三重母音がなく、発音時において唇が緊張し、音節の基本構造、子音+母音において母音の口構えが先立つ子音によりくずされることがない、といった特性が音としての純粹さを保っていると考えられる。

### 2-2-0 子音

**2-2-1 調音点：** 母音と同じく子音も前よりだろうか。いま硬口蓋・歯茎音まで「前より」に含めるとすると 22 中 16 が「前より」。日本語では 25 中 17 でこれだけでフランス語を際立てる特性とは言えない。そこで数の比較でなく対応する子音どうしを他国語と比較してみると、例えば [t] [d] [n] [l] [s] [ʒ] [ʃ] [ʒ] ではそれぞれに舌端の位置が英語に比べて「前より」といえる。

**2-2-2 「前駆」(anticipation) の現われ：** すでに 2-1-3 で母音は先行の子音の影響を受けないと述べたが、さらに実は母音の口構えが先行の子音のそれに前駆し、子音を発するときにすでに母音の口構えができていくということである。(仏 pure [pyʁ] と英 pure [pjʊə] とを比較されよ。)

**3-1-0 フランス語にない日本語の特性：** いうまでもなくこれはフラン

ス語系学習者の弱点であるが、調査で得た知識を音、アクセント、リズム、イントネーションの順で整理してみる。

3-1-1 「ら」行音：これはフランス語系のひとつに限った難点ではないが、フランス語系のひとつにとっても高位にランクされる難物である。あるフランス人は [l] と [d] の中間音というつもりで修得したといった。

3-1-2 「が」行鼻音：フランス語では [ŋ] は building, camping, standing, etc. のような英語からの外来語においてしか聞かれず、また [ŋ] + 母音という組み合わせはないために、tamago singeki, gyogyō etc. において [ŋ] が [g] で代用されやすい。ちなみに逆に日本人はフランス語を学ぶとき *église* [egli:z] 「教会」; *exercices* [egzɛrsis] 「練習」 etc. において [g] が [ŋ] と発音されやすい。

3-1-3 「は」行音：フランス人は「はな」を「アナ」と発音したりするとはよく聞くはなしたが日本語に熱心なフランス人はつぎの理由で訓練しだいでそう困難なく獲得できる音だという、すなわち：

a) [h] はフランス語音として標準では現われないが文字 h は表記されているから字をみるたび音 [h] は意識されている。

b) 英・独語を学ぶときは必要であるので学んでしまっている。

実際には語頭より語中において母音に挿まれているとき、より困難なようである。

[例] *asabi, sōbyō, taibō, etc.*

3-1-4 高さアクセントの異なる同音異義語：

[例] 雨 / 飴; 錘 / 霧; 箸 / 橋; 親切 / 新雪 etc. この種の区別は特に2音節語どうしが難しいようで、あるフランス人たちは *ame, amé* のようなアクセント符号をつけて欲しいと望んでいた。

3-1-5 音節の区切りと拍の区切りの相違：前述したようにフランス語の音節構造の基本は〈子音+母音〉であるから「なんにち」がとかくなにち、「かんなん」がか<sup>ん</sup>なん<sup>ん</sup>などとなりやすい。と同時にこれは日本語の特性の拍の区切りがフランス語の音節の区切りと様相を異にしているこ

とに起因している。とくに拍の区分が「ん」で終わり、後続の拍が母音1個より成るときが難しい。

【例】 han-i, tan-i, si-i, i-i-e etc.

フランス語はしかしながら英語のような強弱形式の言語ではなくリズム単元が同じ長さに保たれる言語である\*ので、この点では拍形式の日本語に近いとも言えるが、リズム単元は拍と異なり数語を含む長いものもある。

3-1-6 <母音(A)+子音-[j]+母音(B)>など：日本語で ri-yō, ki-yō などのばあいでは、このばあいはフランス人にとっては1音節語 ryō, kyōの方が発音しやすい。しかし母音(A), (B)の組み合わせ方により逆なばあいや、両方とも困難でないばあいもある。例えば「ぎよ」は人名に Guiot または Guyot [gɥjɔ] があるので比較的やさしいが「ぎょ」は困難なようである。

さらに kyō と kio を、つまり間に [j] の有無によって分けてみるなら長年習慣化している Tokio の綴りにみられるように kio の方がよりやさしいことはフランス語では qui ôte のような語群が存在することからも確かみられる。しかし「きあ」と「きゃ」においては、それぞれ近い qui a または café [kɛjafɛ] (パリに多い発音。標準は [kafɛ]) があるのでともに困難を感じないようである。

要するにここでも日本語の拍の問題「きよ」「ちよ」がフランス人の考える1音節ではなく、2拍であることを指導することが大切なのであろう。

3-1-7 文の平板イントネーション：フランス語においても n'est-ce pas? 「でしょう?」 hein? 「え?」 s'il vous plaît 「どうぞ」 または dit M<sup>me</sup> Lepic à l'aîné de ses trois enfants 「とルピク夫人は3人の息子の長男に云う」といった長いものにいたるまで、言い添えられる文や語句において平板イントネーションが現われるが、日本語では基本となる文のイントネ

\* リズム単元を例示すると Nous avons encore une heure de chemin. 「ぼくらはまだ1時間の道のりがある。」 [nuzavãðãko: ryncœrdɔjmẽ] ではリズム単元は 1.2 で、それぞれの時間的長さがほぼ等しい。

ーションが平板でありこれが習得し難いようだ。

[例] 「新聞はけさきていますか。」

「昨晚から全然眠っておりません。」

「やまぶきはどの花だか教えてくれませんか。」

3-2-0 両国語間に酷似した音：日本人からみれば「ら」は [la] または [ra] と酷似と扱ってしまうかもしれないが、外国人側では混同は許されない。その意味で「ら」はフランス語にはない音として前章で扱った。つぎに扱う「ん」にしても厳密に言えば日本語独自のものであろうが通常 [n] で代用されて支障はまずない。この後者のようなばあいを例挙しその異同を考察したい。

3-2-1 「ん」と [n]： つぎのように分けてみる。

a) 語尾のとき：—「井上さん」「瓶」などで出る「ん」を多くは [n] ですませている。耳障りとはほとんど考えられないが、しかし滞日年数の長いあるフランス人神父は「十五夜お月さん」で歌われている「ん」は非常に美しい音でわれわれの持たない音であると言っていた。

b) 語中で音節末のばあい：—sen-ri, an-nai など次の音節が子音で始まるばあいには「ん」が [n] で代用されていてもあまり気にならない。また学習の困難点ではないが、「たんい」のように続く音節が母音かまたは母音+子音のばあいは3-1-5で述べたように拍の区切りの困難さのために、「ん」を [n] で代用させたとしてもやはり難しいケースのようだ。

3-2-2 「わ」と [wa]：「は」「わ」は [wa] で代用されて用がたりているようだが、少し細かく考察すると (w) は、左右・上下の口のすばめが著しく、また思い切って唇を突出する(ただし英語の [hw] ほどではない)。日本語の「わ」はより緊張が緩んでいる。

3-2-3 「しゅ」と [ʃ]；「じゅ」と [ʒ]：前章と同じく [ʃ] [ʒ] のケースが日本語のばあいよりも、口の左右(上下ではない)の狭めの度合が著しく、また唇を突き出す。あるフランス人は「しゅ」はフランス語の [ʃ] とドイツ語の [ç] の中間音と考えればよいと言っていた。

3-2-4 「う」と [y], [u] または [w]: これもまた唇のつくりの緊張に関係するのだが、「う」を発するとき唇を円めて突出させすぎると欠陥が生じる。周囲の音の環境で [y] か [w] か [u] となる。[例] Shizyoka [ʃizyoka]; usagi [usagi]; mazui [mazwi]

3-2-5 じ [dʒ] と [ʒ]: 息の通路をいったん止めて発する [dʒ] はフランス語音としては稀で、\*「じ」に相当する音として [ʒ] が出やすい。「徐々に」「じゃんけん」「十本」などというとき [ʒ] になってないか留意を要する。

3-2-6 Mimi と「耳」: こういう場合は珍しいと思うが、たまたま Michel の愛称の Mimi が発音の面だけでは「耳」と同一である。そこで前者の発音が「」という高低アクセントを伴ってそのまま「耳」に対しても用いられるが、「耳」のアクセントの高低は逆で「」であるので誤まりとなる。

4-0-0 日本語にもちこまれやすいフランス語の特性:

4-1-0 ローマ字読みのはあい: 日本語学習の経験も浅く、しかもローマ字読みしかできないフランス人にとって、フランス語読みの習慣がもちこまれやすいことは容易に想像される。

4-1-1 ch を [ʃ]: 例えば Chōsi 「銚子」の Ch を [ʃ] としてしまう類。あるフランス人は Tyōsi または Tyōshi と書けば混乱は防げると言ったが、他の人はこのようにローマ字の統一化を乱す傾向には賛成しかねていた。

4-1-2 母音間の s を [z]: 前例の Chōsi をこんどは [ʃo:zi] と発音される傾向についてである。大阪を「おおざか」、長崎を「ながざき」などはなかなか抜けきらぬ癖である。

4-1-3 si を [si], zi を [zi]: もう一度 Chōsi を例にとると si を

\* 語末にくるばあいは外来語の *bridge* とか *Cambodge* など。語中にくるばあいは *ad* を接頭辞とするもの (*adjoind*, *adjectif*, *adfonction*) と、また音節の切れ目にくる *budget* などがあり普通は [dʒ] だが、音節の切れ目または接頭辞であることを意識して [d-ʒ] と切り離して発音するひともいる。

「すい」[si]と発音されてしまうことも少なくない。それだからこそ、ヘボン式は「し」に chi, 「じ」に jī を当てたのだろうが、いつまでもヘボン式に執着するのは問題で、日本語音には「すい」や「ずい」はないのだから si は「し」zi は「じ」と始めから教育すべきことはいまさら言うまでもあるまい。

4-1-4 gi を [ʒi]: 「ぎ」はフランス語では通常 gui で表わし、gi は [ʒi] と読まれる習慣に拠っている。萩原が [haʒiwara] となる誤まりが起る。パリの萩須画伯の展覧会の広告には *Ogniss* とあった。けれど *GINZA* はよく知られているせいかわりに [ʒɛza] という人はまずない。

4-1-5 e が [ə], または落ちる: フランス語で e 字がどんな位置にきたとき [ə] となるか、または e 字が読まれないうかを説明するとやや煩雑になるので、1つのばあいだけ示すこととする。例えばアクセントを受けない音節末の e 字は先立つ子音が2つ連続していると [ə], 1つだと読まれないうのが原則である。従って *autrement* [o:tʁɑ̃mɑ̃] では [ə] が入り、*maintenant* [mɑ̃tənɑ̃] では通常落ちるわけである。この特性が日本語を発音するときにももちこまれて「佐世保」*Sasebo* を [sazbo] と読まれてしまう恐れがある。

4-2-0 もちこまれやすいその他の一般的特性:


4-2-1 どの母音もどんな位置でもはっきり発音される(ただし [ə] は除外): 面接したフランス人は自分が「わたくしは」と言うとき wa-ta-ku-si-wa と含まれる母音を全部発音していたので最初ぎごちなかったと述懐した。それはフランス語ではアクセントを受ける受けないうにかかわらず [ə] を除くすべての母音はその個有の音を発音するからであろう。「戸塚」を *Toz'ka* でなく *Tozuka*, 「靴」を *k'tu* でなく *kutu* と言うのも同じである。

またフランス人が発音すると、特に「い」「う」が強くなりすぎるのも [i] [u] を強くはっきり言う習慣のためである。

4-2-2 リズム単元の最後に力点が位する: これが自然なフランス語の原則であることからして、とくに同一の意味を表わす日・仏表現におい

て、日本語にフランス語の「敷き写し」が生ずる。例えば *toujours* だから「いつでも」*peut-être* から「たぶん」また文章で主部の *Ce livre...* 「この本は」といった類である。

4-2-3 文のイントネーション： イエス・ノーをもとめる疑問文では末尾が上昇するのが多いから、日本語に訳して言ってもかならず文尾が上っている。しかも日本語の疑問文よりも上りかたが著しいから、その癖が彼等の日本語に現われる。

4-2-4 断定文の抑揚： 面接した1フランス人の述懐によると、彼女がパリであまり日本人と接触せず勉強していた時、*L'amour, c'est une occupation de l'espace.* を訳せといわれて「愛とは空間を占めることである」とした。問題はそのイントネーションなのだが、原文ではノ／＼すなわち小上り・大上り・下りといったカーブになるので訳文でも自然にそれを敷き写した抑揚をつけていた。ところが日本へ来てみると誰もそんなふうには言わない。日本人だったらこの訳文を  という具合に日本語の特性に従って平板に言ってしまう。ここで彼女は原文についていたフランス語の抑揚による表現の感情的価値が日本語に訳して読んだ際失われてしまうのを感じたと述べた。もちろんわれわれ日本語の文章もそれに個有の抑揚の組み合わせによっては日本人的感情をそこに盛りこむことはいくらでも可能なことは言うまでもないが、フランス語の抑揚とはかなり異質だということはいえる。

5-0-0 日本語教育への外国人学習者の意見： さいごに蛇足ではあるが面接した数人のフランス人のローマ字日本語への提言をまとめてみよう。

5-1-0 ローマ字表記の統一： は強く希望されている。1フランス人は外国人に迎合したような表記法は無用な混乱を招くばかりだからはやく一本化して欲しいと語った。しかし周知のごとく歴史的事情もあり古い使い慣れた表記法がなかなかやめられぬのが現状である。

5-2-0 ホモニムにアクセント記号： 特に憶えにくいのは2音節語だそうで、これに *âme, amé* といった高低アクセント記号を付けよという注



文が2人のフランス人から出された。

5-3-0 長音記号： 母音をのばすときには必ず付けて欲しいとの願望である。Tōkyō, sayōnara など。フランスにとっては短母音はやさしいが長母音が難しいという。[例] 雪 / 勇氣, 靴 / 苦痛 *etc.* これは単に母音をのばすというだけでなく、つまりゆーきという2音節でなく、ゆうきと3拍として把握することに困難があるためだろう。他方 *noh* といった表記はよくないと1フランス人は言った。なぜなら「農薬」を *nohyaku* と書けばノーヒャクと読まれてしまうからだという。(70.3.3.)

あとがき：

1. 2言語の対照を干渉するという面に限ってであるが、なるべく総体的に捉えたかったので英語系学習者にもみられる共通の弱点があってもあえて省かなかった。

2. 日本語教育公開講座の口頭発表内容をふりかえって不適切・不完全が発見されたので、修正したり事項の配列をかなり変えざるを得なかった。

3. この小論の資料を提供してくれた面接者はユベール・マエス氏(パリ大学文学部日本語科主任)クロード・ロベルジュ氏(上智大学外国語学部助教授)ジャヌ・ゴルベルス嬢(早稲田大学語研日本語教室学生)マルティヌ・マチアス嬢(青山学院大学文学部講師)である。またNHK国際放送のフランス人アナウンサー数名の日本語の発音も役にたてた。また日本人のフランス語発音学習の問題点を考究された目黒士門氏(小樽商科大学助教授)の「言語干渉と発音教育」(日本フランス語フランス文学会誌 No. 5 所載)も示唆を与えてくれた。紙上記して謝意を表わす。